

十七字抄

特別  
イ4  
1919  
730



44  
1919  
120  
730

十七字抄

昭和十五年十二月



一 福なりと天下にこわいあり 大江丸

一 枯れ枝の静けとまらけり秋の暮 甚道

一 一夜二枚蚊のめろきほほひ 春武

一 更なるや世をほろろ 舞の影 相向

石の考や夏を染く・家日記し 芭蕉

一 秋風吹て暮秋歎す人誰か子ぞ

一 枝ささる世にわはぬ世(一)ま

一 いやくと願ふとありくを書しあは

一 牛部を飯の考聞き残る人

一 塚もうごけ我泣こるは秋の風 芭蕉

一 見え方のうしろやおかし秋の風 芭蕉

一 馬を我を残す日遠く茶の匂

一 美作の我をの山か日記し 芭蕉

一 月かこ鐘は沈むを海の家

・ 都はよききしきや餘のふく 庵山

・ 富士の風や舟の載を江にふせ

・ 二日舟のふは花のあふあふ

・ 世にうき世我海に公黒

・ 白鳥は石にたははははは

・ あんこをあるき 舟のま

・ きりくす 忘方に啼 舟のま

・ おおとまを風とあはれの捨子

・ 若さまんおこぼりけり花椿

・ 鮎の子の白鳥送り 別

巻末

一 ちぢの産たけはきはる年の暮は 燈山

一 塩鯛の産くきも実し魚の産

一 櫓の産ん鵬初の夜やるん丸

一 <sup>梅</sup>ちぢかるん櫓ん親しきか家か丸サ暮村

一 ちぢかるん木あるは言りす櫓のを 木陸

一 ちぢき身な後き栗山子丸 寂寂

一 ちぢく向け中な新しと秋の丸 昔昔

一 ちぢく若し油しの末の叫音音 笑印

一 ちぢく飛心はおぬかけら丸丸 見道

一 花に酒行と休の心の丸 暮太

一 ちとあさんや甲の下のまらしに 草書

一 菊の花咲くや石巻の石の間 草書

一 天地のめぐり色うし今の白 草書

一 蚊へのゆきふくもそし今の月 草書

一 埋め家や聖い白実の歌法師 草書

一 菜畑に花見顔うき花かな 草書

一 晝見れば首筋赤き草花 草書

一 暗の夜を大針に縫ふ草花 草書

一 まいと行く水際涼し丸か草花 草書

一 ちとあさんや花もろき山の朝 草書

一鹿の聲心に角はなかりけり

麦林

一思あふして終に暮り得ぬ牡丹のふ

流月

一義朝の心に似たり秋のふ

菖蒲

一此乃や行く人多し秋の暮

一さくらむと秋の寺の鐘

一年あふぬま着あはきはきあふ

甘藷村

一首くつ縄きみなり一年の暮

一侍は胸さく切らん炬燵のふ

支那

一更く夜や山原もて炭を挫く音

山原

一あつとて庭の庭に柳のふ

一 木枯の果はありけを海の春

六九

一 叶のあやあまうとさよふ人の色

大に丸

一 やあうらん人多け行くや勝角力

几世蓮

一 鐘の音の輪とまゝ来た夜長也

子規

一 秋まつや瓜も茄子も老の教

〃

一 去き寝や礼や死す三國志

〃

一 飾うも後ろは見えぬ兜

不傳

一 ねんよとつげは浮世の懐也

支考

一 山のをしんは日本を茶桶

菊舎女

一 朝鳥や蚊屋の雨から語りあけ

杉原



一 枝カケヒや命をかきもつたからう ヤモセ

一 朝白は下手のかきもつたあんなさう

一 え何ぞきもくぬすまぬや男破の花 花の舞

一 も念ふ心はるんぬ葉山も死ん

一 こほぬと風拾いぬく千鳥千代

一 木も木のおのこぼるる音や秋風

一 産や膝の力の押へとも

一 結出を解を風柳ふ

一 うぐいすは起せどゆあつ柳死

一 花咲ぬ身はぬいよき柳死

一 ちかきも風にまかせ枯尾花

一 根は切んで極歩にあり枯尾花

一 ゆくゆく漁のすゑかや崩れ築 むさ

一 舟をたてて来た顔の小鴨也

一 黒みはし沖の時雨のりところ

一 寝かすうの方にまよちやまきりす

一 ぬれぬのちやあま子の身の終り

一 我が事と泥灘の逃げ根芥也

一 閑けさる山岩にーみる餘の聲 甚道

一 木枯れ岩吹とがる杉樹かえ

一 秋ふかき隣は何さする人ぞ

芭蕉

一 木の七とにけし鈴と梅も

一 五月の白とあつめを早し流る川

一 空の峯いしくら崩れそ月の山

一 狐もや鶺鴒にぬのれきる夜に

廿三打

一 およぐ時よきふさぎの生むの性も

一 濁王の口や牡丹を吐くんとす

一 古井戸や飯に飛ぶ魚の音暗

一 釣うよびし鯉の巨公玉や吐く

一 石舟一ツ埋又掃して荒美ふ

● 秋風や酒樽にのりて逸者相尋る

● 花の暮らまゝと取く女あり

● 時鳥平あ城をよみかひに

● 戸を叩く狸と袂と惜みけり

● 草枯れし狐の飛脚通るけり

● 虫さくちの白のいのち提燈

● 化さくち今代り寺のいんげん

● 葉菊の菊さうらの名は無くもかみ 焼き

● 手折し色くさくさ黄菊あり せり

● 葉菊の菊鮮くんまの節句あり 葉を

一 菊のよき花をよしの月

支考

一 犬あふらふは秋の笛を

けり

一 夏時や晴ことの栞杓あ

一 碧を焼いてお鶴をあつて酒は

一 今北角天地を栲とのみ破る

一 酒を夢ついで葉の花見かふ

一 花身や花酒飲まんと思冠り

一 うぐいすの葉おかきき初春のころ

葉を打

一 年をよみおとすは口をきく

一 いかんかの心もあつて花はらわ

一 おもひに細腰高きあまふふ

一 子をまきくぬきく無を枯空に

一 狐の燃つくはるか枯尾花

一 いづれに世の家の軒

一 麦まきわらふとまき顔ばやう

一 古寺の森のまきまきをまき

一 二村に賢を軒冬木を

一 園あつた葉のゆを遠夜に

一 四をあまの葉のまきのまき

一 馬の毛にほくのから枯空を

一 蒲條と石の日の入の松を並べ

一 松のまゝはむきく便り也 井冷

一 尾花松を四角に並べ三物一ふ

一 白くしとまのしきやまのつはみふ

一 石の端に石の端に石の端に石の端に

一 白魚や松のまゝ江のり

一 才の野や重き今を山代

一 山あまのまゝ新に松桐の松く

一 虫のこ人冬に夜半の感

一 係あまの丁史このふれ秋の松

清大森

一 笑とや暮の納念の戸口に挟まんて

一 塔影の敗荷を磨すの口を

一 るらくと鳥に食まんを秋の餌

一 わか歌の金に一山夜やキラキラス 暮大

一 おちけと暮とや視のキラキラス 丈44

一 つゝのあす所く掃むキラキラス

一 白髪ぬく枕の下のキラキラス 芭芭

一 夜更を風のものやおぼあ み代

一 夏川を概すうれーさよ手ぬき履 ササお

一 紅いこと口もあやほら か代



● ちくとおふ<sup>キミ</sup>の<sup>ミ</sup>ま<sup>ミ</sup> 井冷

一 帷衣の白きん采もつ初儀<sup>ハ</sup>

● 初汐や腋に音もる<sup>ハ</sup>在<sup>ハ</sup>摩<sup>ハ</sup>船<sup>ハ</sup> 小波

一 ちと初いた山葵<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>話<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>ん<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>り

一 四君子の野菊と笑<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>柳<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ま

一 冬木三徑花古くもあはさき

一月に領す長堤十里人稀に

一人うらむ年じせうもの今年廿

一 狼や牧浜くき山の月

一 狼の遠きや月の剣波

一 鶴鶴に軽き姫や紙礫

一 宴月やわらて大樹の影もま

一 虫各々人各々夜よの感

一 洗い上げて予草の心量競

一 忍へとや尻鈴鳴る止まぬね

今又と  
俣

井冷

小波

一 蜻蛉のふにこきき目玉丸

一 夏の宵入るに似て夜叉に似て

一 堀の出入おまや石室や茶の葉

一 星は少時消顔より雲の底より

一 すすきよら裏ハ鉦うら光琳寺  
漱石

一 叩かんと晝の飯をほく末魚より  
洒井

一 山の仁王の迫る若菜より  
醒雪

一 まの秋の大鐘つらや慶法より  
洒井

一 石垣に鴨吹きよらう瓜より  
小波

一 行く人の松竹の色にまらけり  
新名村相

一 大抵書に正しき書と云ふは

子規

一 月の出や皆昔にて、小田の

一 勿体なや、襦袢は、紙衣の九十

句布

一 信心のぬれ世にまじり涼しきよ

一 涼徹す銅履の心身を冷ます

一 昔のぬれぬれや、たのしみ行く

一 昔のぬれぬれや、たのしみ行く

所傳

一 十月のね態、今にあらん子規

子規  
田朝

一 魚肥ち七十三灘上り、築

一 板さくや三寸襦袢上り、鮫

一 霞けり山消えしを塔一つ

一 宇治下の紫のみ舟や夕かする

一 夕まにちや、鯉の頭よ

一 うすものを掛け衣桁や風はる

一 秋もぬと柱の拂き動きけり

一 鐘の音の輪をうらまの夜長は

一 行秋や一千年のほとけはち

二月廿

一 行秋や杉森としまきや

一 延帆の風は白きさの海はけり

一 案山子と目鼻あつけり浮世は

一 ちんが中ん最ん愚んまゝおとし子れ

一 冬らや家物四五明に足らぬぬ

一 冬ら某店ついでん家物てぬ

一 冬顔の女湯らぬすあかすこま

一 くらうぬ又膚の汗のえぬ

子子

一 漁河暮の魚け交りを標うぬ

一 荒河や島もえんずぬア高し

一 蝦作らしたわ紅まの山余ぬ

一 黄まらわぬあやおに這入るぬ

一 舞用書改道念ひあまこぬぬ

田のみの落し御者のふりせし日相

一汗をたれお家の敷の深きころか

一ようをひて静かころををかきつばた

一栗と拾ひん行くを道とりのか山敷に

一茶の花や黄葉の傍今うら誰

一萩松んと山門高し草履寺

一栗山子さく都止くの次あふふ

一豊平の田のみの栗山子沈みあふ

一山田守と栗山子も兵の軍人か

一清宗田の法師あふか、一ころか

一 俣めきて 風鈴 けつや 僧の 長河

一 道傍の 春の まんまん 蛸

一 古き 室の 暮暮 深窓 安らぎ 日 夜 哉

一 楊柳村の 暇 投人は 生活 哉

一 遠の げば 柳は 夕の 小村 哉

一 奥深き 見え ありや 森の 暮暮

一 時計 鳴るよ 心ど なる 寺の 暮暮

光悦寺

一 稲刈り 姿の 暮暮 暮暮 暮暮

一 村の 一人 いつと 稲を 刈る 人 哉

一 夕暮の 静かな 包む 稲の 村



一 寒燈に柱も細く思ひいふ

一 竹と共の裏へし寺や陰たの鐘

一 恋猫のゐるあけある尾うみ

一 恋猫とあつたみつとせうとまゝ

一 氷庵とゆふがー落ちぬ猫の恋

一 茶壺の猫梨と壺にるひけり

一 茶を入り流すも居る茶の所

一 砂痕の住めば泥恋一春のる

一 星の光をまわつて人や門涼 子規

一 年のものくさるやも夜嵐 子規

一 桂枝瘰癧を云夫いと妹か肌を

一 ぬけやすき瘰癧を松盤を頼頼

一 秋の海はサリこと入りの家 子記

一 行くまを剃り落し眉を 子記

一 羨美しそ手のひらるゑの山の寺

一 五月雨や小袖をるゑく酒の一々

一 あふ池やうららかにあふる

一 ひとつの海を清くしん 子記

一 大佛をば合ぬる 子記

一 只今更木刀風を暮山 春の嵐

一 休海消えて漁子ニツ三ツ涼

か

一 短夜ゆ詠るる橘砦

一 川々の橋ん柳やうき

小波  
新  
子記

一 店先にまんとる小菊盛るる

一 日暮りや八百八町留まつ

一 稲妻や二尺八寸そりやこそ抜いた

お美

一 炭取の店もあつくも朽葉あふ

一 風のまはるまゝこの風を丸ん打つ

一 初みや蟹刺したての男あ

一 蟹もも枯れたる二家おね

一 岸近するも秋の夜長のまをひき

一 蠅おや蜻蛉の鐵椎針未だ成くま

一 死なば秋霞のいぬ向を面白き

一 深山木や空のぼんぼり秋の空

一 杉の朽ちを御凍しとの遺るける 竹

一 月涼し橋架け竹やとぬいつ 竹外

一 いざ風の鏡かがみきりこゑ雪の峰

一 誰かえそや木ふはさるや山家集

一 古酒杯中の秋ん地、まや江上

一 身はるや愁をゆくぬ朽きぬ

一 櫻焚りと新蕎麦の玉を炊く哉

一 赤癩よ不言よ金よ年の暮る

一 新蕎麦の酒のちるもの月細し

一 睡足りと一はくく蠅とおあま

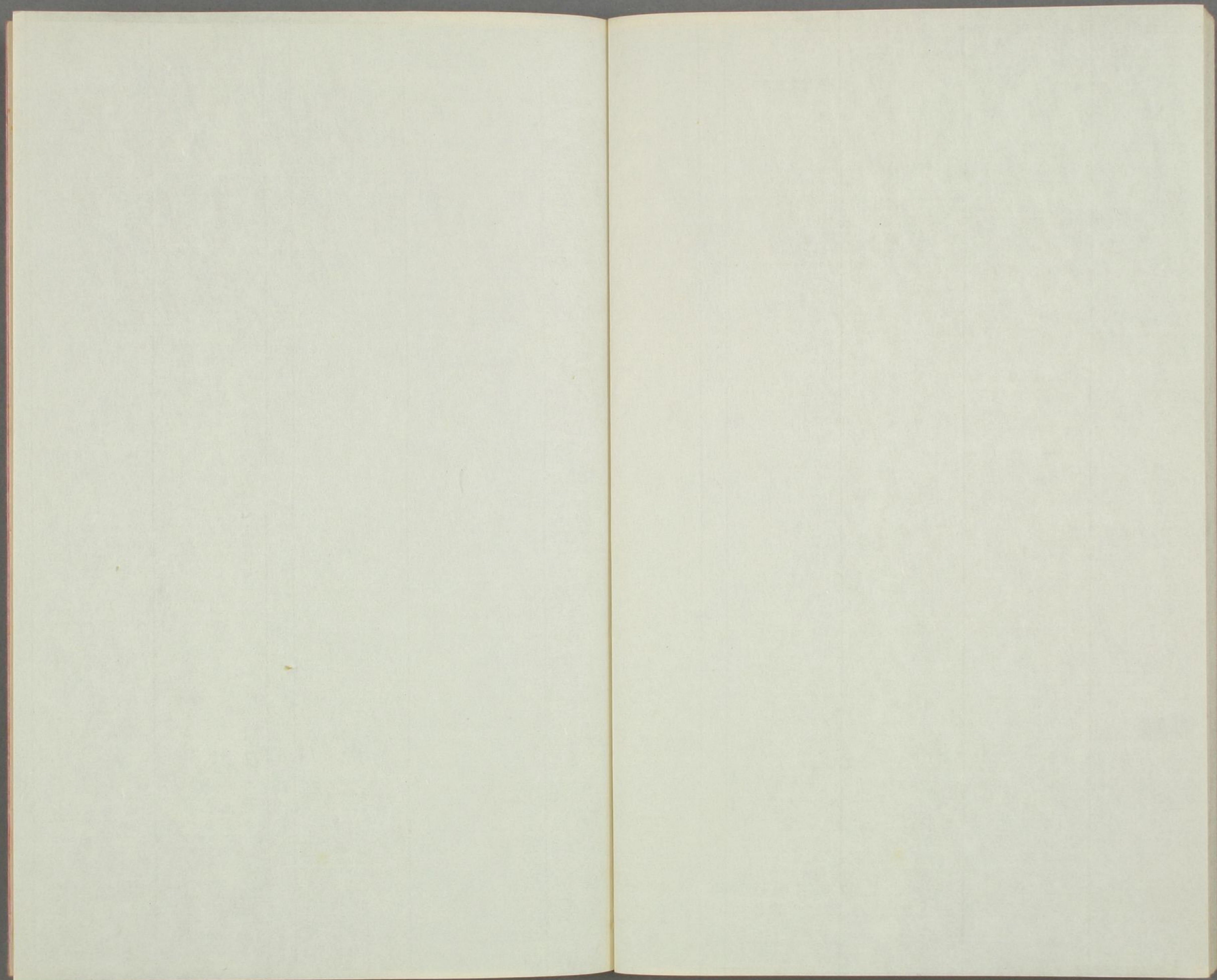
一 初蟬のざいとばかんな初まきし

一 枕沼の骨拾けりよ枯念花 是は枕沼寺

一 秋まのさく夜振るるのみる音

一 川の名の桂お焚く出湯哉 終極寺

一 晴しをを鳥ぬしややれ庭の柿 小波京外  
川邊お



此物ニ養子居不録ノ一也一日龍岳無  
聊ニ慰子ニ為之古き手帳ハ此ノ録  
ノものと字合す必らず一七亦向ふこと  
録中第一四ノ一と此一書を物一畢ノ與  
斯以之推すべし

昭和十五年十月十日 春城志岐



